

## 強制抑留記録の落穂ひろい

福井県 片山 清次

今日まで表題の記録を自分の手で何度も書いてきた。また多くの戦友が書かれた貴重な記録も時間の許す限り有り難く読ませて頂いた。今回はそれらを踏まえ、どうしても書き残しておきたい事項に関し、思いつくままに記述して空白を補うものである。

第一話 『海ゆかば』の満州とシベリア

『海行者美都久屍 山行者草牟須屍 大君乃敝爾許曾死米 可敝里見波勢自』「海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の辺にこそ死なめ顧みはせじ」

これは万葉集末期の武人であり代表歌人であった大伴家持が、愛する家族と別れ、征で立つ防人の気持ちを歌ったものである。

この歌は昭和十二（一九三七）年に東京音楽学

校教授信時潔氏が作曲されたもので、戦意高揚のために数多くの軍国歌謡や国民歌謡が電波に乗り出した中では、あまり目立たなかった。

ところが戦局は下り坂に入った昭和十八年十月二十一日、学業半ばにして征途につく大学生と関係者十万人が参加して、明治神宮外苑競技場で繰り広げられた雨中での『出陣学徒壮行会』の大行進の終わりに期せずして会場から湧き起こった惜別の涙の大合唱が『海行かば』であった。このシンは永く歴史に残る大場面として現在も時おりテレビに放映されている。

開戦当初は、華やかな『軍艦マーチ』や『陸軍観兵行進曲』の前奏曲について連日流された輝かしい戦果も日ごとに影が薄くなり、反面、戦死者の報道が増加して来た。その前奏曲に『海行かば』が吹奏されだした。その影響か？ 世間では『海行かば』は鎮魂歌と思われていた。

昭和二十年四月。暗い戦局のなか、私は二度目の転属先であるソ満国境に近い八面通の新設部隊

に勤務していた。残雪がそこかしこに残る宮庭の一角に、遠く「宮城」を示す矢印の前に整列、前方に果てしなく続く枯れ草に覆われ起伏する丘の上での日朝点呼は、宮城遙拝に始まり、軍人勅諭五箇条の奉唱と続き、この部隊長の方針であろうか？『海行かば』を斉唱して一日の忠誠を誓い、軍務に服する日々であった。

深い哀調と比類まれなる荘重なメロディーは、家族のため国のために生命を投げ出すことに何の悔いをも感じさせないという崇高な気持ちに駆り立てる不思議な力を持つこの歌は、歌う度にその感を強くするのであった。評論家は、この歌は鎮魂歌だ、いや戦意高揚歌だ、厭戦歌だ等と批評しているが、私は征途につく兵士の気持ちを歌ったものと思っている。

あの銃と剣の武器から発する鉄の匂い、馬具、帯革、軍靴から放たれる革の匂い、そして男性ばかりの兵士から醸し出される体臭等がミックスされた中で兵士の巧まざる歌声、これこそ『海行

かば』の真骨頂である。

華やかな舞台でスポットライトを浴び、マイク片手に歌う歌手の歌声には何の実感も湧いて来ない。縁あって、去る平成十四（二〇〇二）年から連続して三年にわたり、シベリアに眠る亡き戦友の遺骨収集に参加した。現地での追悼式には三回とも『異国の丘』と、ウサギ追いし山川でなじまれている『ふるさと』が歌われ、『海行かば』は歌われなかった。考えてみればほとんどの参加者は戦後生まれの方々であり、終戦後『海行かば』は長らくGHQによる禁止令により日の目を見ていなかった事情により、『海行かば』はご存知ないらしい方々が多い結果であろうか？

戦後半世紀以上、酷寒の地シベリアの原生林の奥深く、歌詞のとおり『草むす屍』として凍土の下に眠られるご遺骨を収骨して父祖の国、日本へお帰り頂く追悼歌として『海行かば』は是非とも歌って頂きたい歌であると心から思うものである。

第二話 タイシエツト帰国集結収容所

(ペレスルイカ)の今昔

「トウキョーダモイ」何度も何度も、この言葉に騙され続けて五回も正月を過ごして来た昭和二十四年七月末日のこと。「ブラーツク」の手前にある「アンジヨウビー」の駅から帰国の途について。(タイシエット―ブラーツクまでに記述)

我々を乗せた無蓋貨車は青空の中をタイシエット目指して驀進<sup>ばくしん</sup>して行く。降り注ぐ陽光も緑のタイガーを吹き抜けるさわやかな涼風で癒され快適な気分であった。

まる四年間辛い思いで過ごして来た数々の収容所の前を列車は通過して行く。その度に、そこでの思い出がよみがえり何度も胸が熱くなった。

国境の街グロデコフからはるばる四千キロメートル。帰国の夢を奪われ家畜並の扱いを受け、降る雪の中を降ろされた思い出の深いニューベルスカヤ駅を一瞬の中を通り過ぎ、タイシエット郊外の収容所で下車した。

ここはシベリア本線タイシエット駅からブラー

ツク寄りに五キロメートル地点にある第三収容所である。噂に聞く帰国集結収容所であった。ここまで来れば、もう大丈夫と胸を撫で下ろす。

巨大な松材をふんだんに使った頑丈なログハウスに石灰を塗装した監獄である。外壁から推計しても相当な年代を経過している。建物の棟数や敷地面積からみて地区の基幹収容所だと分かる。

ここでの日々は苛酷なノルマによる労働はなく、所内清掃や軽度の使役等であり、食事は量も多くスープには肉や脂が浮いている。黒パンもうまい。痩せこけた体で帰すと具合が悪いので肥らせて帰すソ連の狡い手段であろうと噂をする。持て余している時間をアクチーフは歌唱指導と称して「赤旗の歌」や「世界民主青年の歌」など革命歌や労働歌を指導する。

アクチーフは全員、栄養状態の良い体で長髪を七三に分け、清潔な被服にソ連軍の長靴を履き、張り切っていた。重労働で失った体力の回復と併せて思想教育も計画されており、日本新聞を教材

として民主の砦ソ連を讃え、米国をこき下ろし、天皇制打破を叫び祖国日本を赤旗の波で埋めようと繰り返し教育するのであった。

その間、息抜きに映画が上映された。夏の夜空を背景に大きなスクリーンが広場に設けられ全員が地面に座って観賞した。日本新聞にも喧伝され歌にも歌われた「若き親衛隊」であった。

ドンバス炭鉱を占領し暴掠の限りを尽くすナチスドイツに刃向かい、祖国ソ連のためにと立ち上がった青年共産党同盟員のゲリラ活動によりドイツ軍を全滅させるという筋書きの愛国映画であった。久しぶりに映画らしいものを見て精神的に満了した。

収容所内には売店が設けられ、民族楽器であるバラライカを始めシラカバの工芸品、マトリョウシカやロシア煙草、チョコレート、ジュース等が売られていたが、トラック運転手など賃金を支給されていた一部の者には歓迎されていたが賃金を支給されない大部分の者にとっては無縁のもので

あった。

最終集結地ナホトカへの旅に備え、各人は最後の入浴を終え下着から帽子、上下被服、編上靴とすべて新品を支給された。

その夜は、所内の一隅にある野外舞台には盛花で囲まれた等身大のスターリンとレーニンの画像が飾られ、その下には机が置かれ馬の尻尾で作った筆と墨汁、長く巻いた白布が置かれているところに案内された。

スターリンに贈呈する感謝文に各人が白布に署名する儀式である。暗闇の中、舞台周辺には巨大な篝火が数箇所にわたり設けられ、パチパチと大きな音を立てながら明々と燃えたち異様な雰囲気立ち込めている。署名する机の両脇には楽団員が居並び、バイオリンでスターリン賛歌を繰り返し繰り返し演奏している。

♪国から国へ 峠を越えて 自由の鷲が飛ぶように おおスターリン聡明な偉大なる教師 我らは拳がりて讃えん

スターリンに対する思慕の念を最大に表現したこの旋律は、ここまでスターリンにおもねるのかと聴いていてうんざりとする。署名机の周辺にはアクチーフが散らばり鋭い視線で署名者の手元を注視している。到底拒否できる雰囲気ではない。これも通過儀礼の一つだと割り切り署名をした。署名式は夜通し練り広げられた。

明くれば全員、収容所裏の広場に集合した。緩くカーブを描いている引込線には既に二段に仕切った有蓋貨車が数十両、扉を開けて停車していた。帰国式が始まった。列車の横に整列する我々に対し、輸送指揮官と称するブルドックのような人相のソ連軍大尉が壇上に立ち、二三分簡単な挨拶をした。ついでキムと名乗る通訳が輸送指揮官の帰国にあたり注意すべき事項を長々と日本語に訳して我々に伝えた。ソ連人の体格、鮮やかな紅毛の朝鮮系容貌の人物で、名前が示すとおり混血のソ連人であるが何らよどみなく滔々とたとうと流暢な日本語をしゃべり、一体この男はどんな素性の人物

か？ 大いに好奇心を刺激された。

居並ぶソ連当局の幹部達のなかにタイシエツト地区政治部長のガンジコフ上級中尉やグリンスキー中尉等が長年にわたる政治教育の成果を目の当たりにして満足そうな顔つきで並んでいた。

型のとおり日本人梯団長のソ連当局への菌の浮くような感謝と帰国後の覚悟を述べた挨拶で式を終え、列車に乗り込んだ。タイシエツト楽劇団が『赤旗の歌』や『世界民主青年の歌』などを高らかに吹奏するなかを帰国列車は一路ナホトカ目指し動き出した。

平成十四年八月。あれから五十三年目のことである。縁あってタイシエツト地区の日本人墓地の遺骨収集に参加したときのことである。タイシエツト市内のホテルからクビトークの墓地への往復にクビトーク中学校のスクールバスが提供された。朝夕往復の途次、タイシエツトの町外れの廃墟のように点在する草原のなかに一条の引込線が目に付いた。

線路のカーブが何か？ 心に引っ掛かりそれから毎日、朝夕この場所を通るとき付近の地形を総合して観察すると五十年前、この引込線から帰国の途に就いたことが明確に思い出された。

かつては帰国の喜びにあふれた四万人のカーキ色の集団が帰途に就いたこの地。今は夏風にそよぐ草むらの中に赤く錆びたレールが当時を証明する唯一のものとして静かに横たわっていた。

収骨作業も無事に終わり帰国の前日、ミーシカ運転手はホテルへの帰途、何を思ったのか？ 「タイシエットの監獄の前を通る」と言う。素知らぬ顔をして車内から眺め、写真撮影は絶対にしないようにと言われた。

バスはいつもの道路から外れた道路に入った。速度を落としノロノロ運転で監獄の横から正門の前を通り抜け市内への道に入って行った。獄内には数十人の囚人が監守に指揮されて作業している風景が目に入った。この監獄こそタイシエット地区に強制抑留された日本兵士の帰国への中間集結

収容所であることがはっきりとよみがえった。

先日、疑問に思っていた引込線が、この監獄の裏手に敷設されているのが確認され、往時と変わらぬ風景が現存していることに強い感動を覚えた。なよりの思い出をプレゼントしてくれたミーシカ運転手に礼を言いつて思い出の多いタイシエットに別れを告げた。

### 第三話 プレーヌイ（捕虜）

昭和二十年九月下旬の事であった。旧満州国の海林兵器廠から祖国帰還の夢を抱き、十日あまりの苦難に満ちた野営生活を続けながら徒歩で綏芬河を通過してソ満国境を越え、遂にソ連のグロデコフ市郊外の刈り取りの終わった広大なライ麦畑に到着した。

満州から同行して来たソ連軍の警備将校は「日本の駆逐艦が君達を迎えにウラジオ軍港へ来ている。順番が来るまでここでしばらく待機して連日の疲れをとり帰国に備えて体調を整えて置くように」と通訳から説明があった。ここでの我々下級

兵士の日課は先ず調理用の燃料としてライ麦の刈り取った後の根株を引き抜いて束ねた物を一日二回集めて来ること。次に古年兵から随時命令される飯盒での水くみの使役であった。

ある日、近くの井戸へ水くみに行ったとき小学五年生程度の猿のような顔をした少年が、水をくんでいる我々のところへ近づいて来た。薄ら寒い日であるのに汚いシャツに裸足という貧しい服装を見て「ロスケの野郎はよほど、物資が不足しているんだな」と話し合っていたら少年は傍らにあった三十センチほどの煉瓦の台の上にあがり、我々と同じ高さになったところで我々の方を向いていきなり「プレーヌイ プレーヌイ」と大きな声で何度も呼びかけてきた。

昂然と胸を張り、侮蔑に満ちた顔つきを露骨に浮かべ我々を見下した態度は、言葉は分からぬまでも良い言葉では無いことを直感した。

入ソ直後のことであり何の意味か全然分からない。「このガキ、何を吐かしているのか」と皆で

話し合っていたところへ水くみに来た三十年配のソ連兵が、一瞬バケツを置き、得意になってなおも「プレーヌイ、プレーヌイ」と大声で叫んでいる少年のところへ走り寄り、少年に対して語気強く叱り付けた。少年はソ連兵の言葉に一瞬戸惑った顔つきを示した。ソ連兵の重ねての強い叱咤の言葉を浴びて泣きながら走り去って行った。

水くみを終えた、ソ連兵はバケツを置いて我々の方を向き、あたかも自分の息子の非礼を詫げる父親の様な態度で軽く頭を下げて帰って行った。

あの満州で飢えた野獣の様に乱暴狼藉の限りを尽くしたソ連兵の中にもこんな人間性のある兵士もいたのか？ と強い感動を覚えた。

昭和二十一年の春、私はタイシエツト市郊外の第五病院の洗濯場に勤務していた。簡単な日常会話も可能となりロシア文字も少しは読めるようになったころの事である。

某日、責任者のトーニヤに「プレーヌイ」の意味について聞いてみた。彼女は自分の唇の上に人

差指を立てて「カタヤーマ、これは捕虜という意味で悪い言葉なのよ」と優しく教えてくれた。

グロデコフ郊外で少年が誇らしげな顔をして我々に投げかけた言葉の意味がやっと理解できた。

第五病院の所長スハチエンコフ大尉は、時々ノルマ向上のために作業隊員に訓示をした。気に入らないときには顔を紅潮させて「ワエンヌイプレーヌイ」という言葉をよく挟んで口汚く吠えた。

副所長以下、医師看護婦達は我々に対して気に入らないことがあった場合「ニエハラシヨ」。最悪な表現として男性ロシア人は卑語「ヨッポイマ―チ」をよく使った。

軍人に対して「捕虜」という言葉は侮辱の最たるものであることは彼らも知っていたと思う。日常、仕事の上でのロシア人と口論しても彼らの口からは前述した卑語を乱発するが「プレーヌイ」の言葉を聞くことは無かった。

抑留経験者は政治将校コワレンコの指導による「日本新聞」をよくご存じであろう。あの新聞の

各ページの左上に小さなロシア語で『日本人戦争捕虜』のための新聞と印刷されていたことを知っている人は何人いるだろうか。あの忌まわしいノルマの餌に配られた祖国への往復葉書にも「俘虜用郵便葉書」とゴシックで印刷されていた。

我々軍人は常に変体仮名で書かれた難解にして長文の軍人勅諭に縛られていた。泥沼化してきた中国戦線では軍紀風紀の弛緩が問題化し始め、その対策の一環として昭和十六年、当時の陸軍大臣東條英機は「戦陣訓」なるものを制定して「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残す事勿れ」と軍人の心構えを示し、軍人にとって捕虜は最大の恥辱とされた。

関東軍を始め全戦線の将兵は昭和二十年八月十五日、天皇の命令により武器を捨て投降した。昭和二十年八月十八日、参謀総長・梅津美治郎は「終戦詔書渙発以後、敵国の勢力下に入りたる帝国軍人、軍属を俘虜と認めず」との奉勅命令を全軍に発し混乱を防いだ。

一方ソ連は「無条件降伏の軍隊は全員捕虜である」との見解を譲らず今日に至っている。

「抑留者」として処遇すると多額の保証金を負担しなければならぬ。ロシアが「捕虜」にこだわる真意は、ここにあると言う。

「非はわがソ連にあり」と言う自己批判を文芸春秋に発表して話題を投げアレクセイ・キリチェンコ氏も九段会館での講演で「捕虜」という言葉を使ったことについて反省の言葉を述べている。

先年の慰霊祭で我々の先頭に立って抑留問題に献身された故青木泰三理事長のご講演の中でも、この言葉の問題を大きく取り上げられた。

あの元気あふれる大声でのご講演が最後になろうとは夢にも思わなかった。平成十六年一月十七日、急逝されたとの新聞紙上で拝見し、ご冥福を祈るものである。

日本人抑留者に対する多くのロシア人のとらえ方について平成十五年、十六年とロシアの各地を旅行したとき私が見聞きした限り、依然と

して「捕虜」と言う目で見られている感はぬぐえられていない。たかが言葉と言われるが内外を問わずあらゆる面から粘り強く取り組んで、いわれ無き「捕虜」と言う屈辱的な言葉を消し去らねばならない。

平成十七年二月十八日の全国紙によると日本政府はシベリア抑留者に対し『戦時捕虜』とのロシア側の呼称を『抑留者』に変更するよう求めたが、ロシア側は日本政府の申し入れに対し正式に拒否したという記事が載っていた。

#### 第四話 日系ソ連人警備兵（カンボーイ）

入ソ当初の事である。収容所の外は既に固く凍結し、馬の吐息は蒸気機関車の煙突から出る煙の様に白く凍って馬の鼻孔が激しく吐き出されている。マイナス三〇度〜四〇度。満州でも体験したことのない酷寒の世界が毎日、展開されていた。

ここでの当面の作業は炊事や病棟や管理棟等の暖房用の薪採りが多かった。一メートル余りの長い二人挽きのこぎり（ピラ）と斧（タポール）鉄

棒（ローム）を持って近くの森へ行き手ごろな松や白樺を伐採して薪を作るのであった。

ソ連警備兵は防寒帽、羊の裏革で出来た外套（がいろ）（シユーバ）、防寒手袋、フェルト製の防寒長靴の服装で身を固め、自動小銃を肩にして我々を作業場へ追い立てる。我々は戦塵に汚れた夏の軍衣、口の開いた編上靴、グロデコフ郊外で支給された苦力用の黒い綿入れ上着がすべてであった。

冷たいと言うよりも針で刺すような疼痛を覚える野外作業場では、こんな服装では堪えられない。特に手足の末端部が針の先の束で間断なく突き刺されるような痛みは口では形容できない辛さである。編上靴の足先は特に痛く、反射的に足踏みをして血液の流れを促す仕事を繰り返す。あまりの寒気に作業ははかどるはずは無い。防寒具をしつかりと装備したソ連兵は、我々の苦境に頓着せず「ダワイ・ラボーター（仕事をやれっ）」と自動小銃を振り回して威嚇する。

こんな日々が続くある日、警備兵の中に日本人

が一人いるという噂が広がった。某日、薪採り作業に出たとき、噂の日本人警備兵が我々のグループの警備に当たった。黒い瞳、黒髪、確かに日本人の容貌である。蒙古人、朝鮮人の顔ではない。骨太で我々と同じような体格である。

彼は作業場に着くと、まず焚火を焚いて一同にしばらく暖を採らせてから作業に掛からせた。そして、たどたどしい日本語で「手ツメタイ、スコシ、スコシ、火アタル、アタタカイ、シゴトシナサイ」と笑顔で優しく身振り手振りで説明してくれるのであった。昼休みのとき彼は「ヤー、パーバチカ、ヤポンスキー、ナマエ、ツシマ、マーマチカ、ロスキー」と言った。

お父さんはツシマという日本人で、お母さんはロシア人であるという程度のこととは理解出来た。そばにいた三十年配のインテリ風の上等兵の男が、誰にもなく「ほほうー、ツシマ閣下の御落胤か？ このシベリアでお目に掛かるとはもう」ウーンと、さも感に堪えない顔つきでつぶやいた。

この男の顔は未知の顔であった。どこか他の部隊から入隊してきた兵隊であろう。入ソ間もない我々にとつてはロシア語はほとんど分からず、いろいろとあの日本人と噂されている警備兵に、あれこれ聞きたいことがあったが不可能であった。

いつも暗く辛い作業の日々であったが、この日ばかりは全員が明るい気分で過ごせたことは言うまでもない。宿舎に帰り夕食の話題は専ら今日、彼から同胞としての暖かい配慮に対し感謝の言葉で持ちきりであった。

入ソ間もない混乱した時期のことであり一カ月ほどの後、彼の警備兵はどこかへ転属して行った。今日まで「日本陸海軍将官辞典」等で津島、対馬姓の将官の名前を何度も調査したがいまだに該当者が見当たらない。「著名人名録」の中でも該当者を調べたがここでも不明であった。

#### 第五話 デジカメラ（乾熱消毒場）

長年にわたり主流を占めてきたフィルムカメラの王座を奪い、今や若者の間ではケイタイと共に

必需品となり、売れに売れているデジタルカメラの事ではない。抑留経験者にとつては忘れることの出来ない乾熱消毒場のことを言う。デジカメラを短縮してソ連人はデジカメラと呼んでいる。

満州から着たきりスズメのままソ連に抑留され、入浴はおろか被服の洗濯もままならず、最低の衛生状態の中で生活は想像を絶するシラミと南京虫の大繁殖を招き、痩せ衰えた兵士の血液を昼夜を分かつた吸いまくりに、更に恐ろしいことに発疹チフスを媒介し多くの人命を奪ったのであった。

ソ連の監獄や収容所では、以前から囚人のシラミや南京虫駆除対策として被服消毒を実施していたのである。どこの施設にもバーニヤ・コンビナート（浴場総合施設）と称して浴室を中心とし周囲に理髪室、洗濯場、被服乾熱消毒場が配置されていた。我々は定められた日時に浴場に行くと、先ず自分の帽子、上着、ズボン、靴下、シャツの洗濯等と陰毛を理髪係の手で剃髪される。そこで

やっと浴室へ入ることを許される。

たつぷりと温湯がたたえられた日本の浴槽ではなく、洗面器代わりの小さな木製の手桶に二リツトルほどの、ぬるま湯が担当係の手で配湯され、手持ちのボロ手ぬぐいで垢だらけの身体をふいて入浴は終了する。

一方、始めに脱いだ被服類は消毒場の担当者が消毒場へ運び入れ室内へ順番に吊り下げて行き、いっぱいになると扉を密閉する。やがて備え付けのストーブに豊富な薪を入れて燃焼を開始し一五〇度の温度で一時間一時間三十分加熱消毒する。その間、ロシア人責任者が終始監視のもとに作業が行われ手抜きは許されない。

やがて消毒を終えた被服類は作業員の手で控室に運び込まれ各人の被服を捜し当て着用する。ストーブの無いツララの下がる室内に全裸で震えている体に、火傷するほど熱くカラカラに乾いた衣服に手を通したときの気分は短時間ではあるが安らいだいつときであった。

その時、嗅覚の面から発見したのであるが人間の皮膚から分泌した垢や脂肪分、剥離した皮膚、付着している採尿等が高熱で長時間熱処理される結果、甘く香ばしい香りが生成される。その香りを分かりやすく言えば、あの食欲をそそる「海老せんべい」の甘い香りとそっくりであった。

ある日、使役で穴蔵のようなデジカメラの掃除に行ったとき、足元に薄茶色に乾いたシラミの死骸が一〜二センチの厚さに溜まっているのを見て背筋が寒くなった。

薬品消毒では大量の薬品を要する。蒸気消毒もボイラー等複雑な機械設備が必要である。だれが考えたのか知らないが森林資源の豊富なシベリアにふさわしい乾熱滅菌消毒施設であると思った。

#### 第六話 カチカチ山

人間は火を使うことが出来るが、野獣は火を使うことが出来ないと言われている。「火と人間」と言う磯田浩氏著の本によれば、百四十年前、人類の祖先にあたる猿人は密生している樹木の風

による摩擦とか、また落雷による森林火災から火を発見して使ったと言われている。

当時、この貴重な火種を絶やさぬために、火の番が重要な仕事であったと書かれている。四十〜五十万年前の北京原人の洞窟には厚く積もり重なった焚き火の跡が発見されたと言う。

それ以来、人類は木と木を擦り合せて火を作り、更に付け木を使って大きな炎として調理、照明、暖房、土器、焼畑による農業へと進化し紀元前三百年以降製鉄法が考えられ更に工業への発展に連なっていくたと言う。

その間、弓錐を用いての火作りの発案を経て火打ち石による発火となった。日本での火打ち石による発火法は平安時代以降から始まり、明治時代にマッチが入って来るまで使用されたと言う。

満州で陣地構築に従事しているときもシベリアと同様に、人里離れた深い山の中で原始時代を思わせるような環境での日々を送ったが、有り難いことにマッチのお陰で火は簡単に求めることが出

来た。

ここシベリアではマッチも貴重品で簡単に手に入らない。そこで考えついたのが火打ち石であった。折れた鋸の切片と石英を含んだ硬度の高い発火に適した石を拾って、文字通りカチカチと打ちながら発火させ、その火を用意したぼろ綿（ここでは支給された防寒衣の中綿を引き出して使用した）に移し火種とし、白樺の皮とか、松やにをたっぷりと含んだ松の皮などに点火する。ここで初めて赤い炎となる。

もう一つの方法は室内で乾いた二枚の板を用意する。その間に前記のぼろ綿を直径五センチほどに丸めたものを板の間に挟んで押さえ付けながら激しく上下に数分間摩擦する。すると焦げ臭い匂いと薄煙りが板の間から出てくる。これを種火にしてペーチカを焚いたりタバコの火をつくり吸ったものである。

当時は、どこのラゲリにもソ連人のためにマガジン（国営売店）があった。二坪ほどの小さな

建物が多かった。

主食の黒パンを始め、油、塩、砂糖、塩魚、肉類等の食品類から衣料品、文具類と、昔の田舎にあった「よろず屋」に相当する売店であった。

そのマガジンで火打ち石と鉄片と木綿の火縄がセットになったものが幾つも壁面に値札がついて売られていた事が思い出される。ロシア人の間でもマッチは貴重品であったのであろう。先年、タイシエツト地区へ慰霊旅行に行ったときタバコを出して同行の若いロシア人にイエースナ・カチューシャ（カチューシャはあるか？）と聞いて、どんな反応を示すか？ 試してみた。果たせるかな「えっカチューシャの歌ですか？」と怪訝な顔付きで見当違いの返事が帰って来た。抑留当時、カチューシャはマッチの隠語であった。

マッチを擦ったときの火花が、あの独ソ戦で活躍したカチューシャ砲（小型自動車に複数の噴射砲を積載した砲）の火花とよく似ているところから、このように呼ばれていた。今のロシアの若者

はカチューシャと言えば歌の題名か人名程度の認識しかないであろう。

「いやーマッチの隠語とは知らなかった」と言いながらポケットから百円ライターを取り出した。今の若いロシア人にとってマッチは百円ライターに変わった。火打ち石は過去の物となっている。

#### 第七話 吸い玉（バーンキ）

入ソ当時、タイシエツト二十六キロ地点にあった第五病院のパン工場で働いているときの事であった。日本人三人とロシアの囚人三人とで、毎日、早朝より深夜まで連日、黒パンを焼いていた。ある日のこと仕事が終わったときイワノフという大男の囚人が長椅子の上に腹ばいになって仲間のマルコフに按摩をしてもらうところに出くわした。

理科の実験で使うアルコールランプのキャップを一回り大きくしたようなガラス製の肉厚の瓶を十個ほど小箱から取り出し、その中の一個を右手に掴み、三センチほどに裂いた新聞紙の一端に火を付けたものを瓶の中に一瞬入れてから取り出し

て、素早く背骨を中心として両側に次々と並べていく。瓶の置かれたところの皮膚は、見る見る瓶の下で膨れ上がり、梅干しの様な色に変色していく。日本ではガラス製のキャップにゴムのチューブをつけ手動ポンプで瓶の中の空気を吸引して患部の鬱血を散らす吸い玉という医療器具を思いついた。

ここでは瓶の中の空気を火で暖め、患部に当てると、瓶の中の空気が冷えるに従って容積が小さくなる原理を応用した物であった。

瓶を取り除いた跡は紫色の「あざ」となってしまう。ばらばら残るが、血行は良くなるという。彼らはこれをマッサージ（按摩）と称し、この器具をバーンキと呼び、体の凝りをほぐしていた。

#### 第八話 増水食

想像も出来ないほど、厳しい寒気の中で常識を越えたノルマのもと、強制された苛酷な重労働、その反面この重労働を支える食事は、全くお粗末な物であった。

ソ連が決定し、麗々しく発表している食糧基準表は数字の上では一応の配慮を示しているように見受けられるが現実には我々の口に入る量とは相当な隔たりがあった。

独ソ戦に勝利したとはいうものの、当時のソ連の食糧不足は深刻なものであった。更に一九四五年はまれに見る食糧不足が追い打ちをかけるソ連市民社会を背景にして、毎日、日本兵士に給養される大量の食糧が、何人ものソ連人の間で動かされていった。

そこに収容所管理者による横流し等の不正行為が各地の収容所で発生した。よしんば量的に確保されても質的には低劣であった。例えば獣肉五〇グラムと示されていても実際は牛骨や臓物が給与されて肉片にはお目にかかったことはなかった。野菜二〇〇グラムの内訳は人間が口にしない牛馬か豚の餌になるキャベツの濃緑の外葉等が支給された。

更に、悪弊と言われた日本軍隊当時の階級制度

が、そのままソ連に持ち込まれた。上級者ほど黒パンは大きなものを取り、実の少ないスープにかかわらず上級者はたっぷりと実をすくい取り、下級者は小さいパンと実の少ないスープを与えられるということが当然のごとく行われていた。そこから空腹感を満たす方法として考え出されたことは、毎回支給される糊状に煮た雑炊に更に水を加えた増水食であった。拳骨ほどの小さな黒パンは二口か三口かで喉に入ってしまう。その黒パンを自製のブリキ包丁で紙のように薄く切り、あぐらをかいた目前に並べる。ちょうどカルタやトランプのゲームをする状況を想像してほしい。

さて、いよいよ食事にとりかかる。飯盒に水増しした雑炊を食事寸前までペーチカの上で沸騰させていたものを足元に置き、カードのような薄切りのパンを横に並べ、あらかじめ白樺を丹念に削った手製の大小五〜六種類のスプーンを用意する。中には飯盒の底にへばりついた雑炊を一滴も残さずすくい取るため先端の一部を直角に削ったもの

まで案出して、さながら画家の絵筆や彫刻家の鑿のびのセットを思わせた。

大小様々なスプーンを使い分け、舌がやけどするような熱い雑炊を一さじずつフーフウと息をかけながら口内に流し込み、時折りカード状に切ったパンをゆっくりと食べるのである。こんな食べ方では優に一時間はたっぷりとかかる。

周囲の者は物好きな奴だと見流していたが、やがて奇妙な現象が発生しだした。このような増水食をする者の中から変調者が見受けられ出した。

痩せた体が更に痩せていくのである。誰が見ても驚くほど痩せ衰えていく。顔は頬骨が尖り、眼の回りは落ち窪んで黒く隈ができ、般若の面を思わせるように変容していく。

時折り行われるカテゴリー検査と称する体格検査での増水食者の裸の後ろ姿を見ると、骨と皮に痩せ衰えた姿になっている。脚は野球のバットのように細まり、両足の太股の間から睾丸が見えるほど、筋肉はそげ落ちている。検査結果は当然、

入院である。

このように肉体的な変容に止まらず、明るいい性が暗くなりトラブルを引き起こしたり感情面にも悪い影響が見受けられることが周囲の関係者にもだんだんと理解されだした。

変則的な食事は肉体に悪影響をおよぼすことを互いに戒め合う風潮が広まってきた。

「オイッ生きて祖国に帰りたいかったら増水食は止める」増水食をやる者を見つけたら仲間呼びかけて中止するよう強く呼びかけた。入ソ四年ごろから食事情も幾分好転のきざしが見え出すのと共に、各人の自覚も効果を表してきたのか増水食の悪習も消えていった。

#### 第九話 第五病院（三七〇病院）

シベリアのパリと言われているイルクーツクから西北へ約七百キロ、第二シベリア鉄道（通称バム鉄道）への入口にあたるタイシエツト郊外の荒野の中にポツンと建っている「第五病院」での状況であった。昭和二十年十月下旬から二十一年の春

ごろまでのことである。ここへ送られて来た日本軍兵士は満ソ国境付近に配置されている者が多く、日ソ交戦の果てに満州各地から垢と埃にまみれ、ボロボロになった夏の軍服のまま乞食同然の姿で家畜のように貨車に押し込まれ、数千キロの長途を移送され、やっとこの地にたどり着いた。

すでに雪がちらつき始めている夕暮れどきに貨車から降ろされた。駅舎とてなく、松の疎林の中に一本のレールが横たわり、機関車の先はレール止めが設けられそこでレールは巻られていた。千人からなる梯団は、休息の暇もなく直ちに雪の降る中を輿地へ徒歩で出発して行った。輸送中に罹病した我々約百人の患者は近くの病院に収容された。聞くところによると、この収容所は満州の四平街に駐屯していた航空隊が主力であると言う。一つ星の兵隊に至るまで全員、冬の軍衣袴、防寒襦袢、防寒靴、防寒外套と、上から下まで新品のものを着用しており、一見して非戦闘部隊であることが分かった。

食糧も十分に積込んだのであろう。誰の顔を見ても血色が良く健康であり、戦塵で汚れボロボロの我々の軍服姿とは雲泥の差があった。

我々は伝染病患者として収容所の隅に設けられた幕舎に隔離収容された。中に入ると染料の強い臭気が鼻をつく。ガラスの代わりに雲母がはめてあり隅のほうに鉤十字のマークとドイツ文学が刷り込んであった。独ソ戦の戦利品である。

舎内には板の代わりに枝を払った松の若木を並べた応急寝台が用意されており、横になると背中が痛くて辛かった。しかし足の踏み場もない寿司詰めの貨車列車内でのことを思えば文句は言えない。毎日、日本軍医が定時に来て手持ちの薬の投与を受けた。このように親切的な治療と玄米のスープで、やっと生気が湧いてきた。

一週間ほど経過したある日の朝、「全員、今夜の列車で病院に入院する」と命令があった。暖かい病室に白いシートが敷かれたベッド等を想像しただけでも気分が休まる。夜の訪れとともに満州

から身に着けてきたぼろ毛布を肩に収容所を出る。数日前に降ろされたニューベルスカヤの線路の上に停まっている一両の有蓋貨車に乗り込む。

車内は二十センチほどの厚さに馬糞がビッシリと隅々まで積み重なっており、それも固く石のように凍っていた。戦利品としてはるばる満州から連れて来られた軍馬が乗せられていたのであろう。

カチンカチンに凍った馬糞の上に、雑嚢を座布団代わりに置き、毛布を被って座り込む。例のとおりガチャーンと施錠される。暖房も照明も無い、巨大な冷凍庫であった。予告も無く列車は動き出した。貨車の隙間から寒風が入って来る。骨の髄までシンシンと浸透してくる。あまりの寒さに誰も口を利く者もおらず、一同暗闇の中で背中を丸めてうずくまる。

時間の感覚も分からぬままに眼を覚ますと、しばらくしてガクンと停車。貨車の扉が開かれ視界に入ったのは吹雪の中、一帯に散在する枯ススキの巨大な株が生い茂る荒野の中に枕木を並べただ

けの駆らしいものが目前に入った。

「全員下車ッ、これから病院に向かう」と引率の声に従い、ぼろ毛布を頭から被り一列縦隊で吹雪の中を進んで行く。横殴りに吹き付ける吹雪の中、立ちほだかる枯スキの株を分けながら前者の背中を見失わないように必死に後を追って行く。周囲には家屋らしいものは一軒も目に入らない。ひよつとすると入院と称して人目の無い荒野の中に連行して射殺されるのではないかと、嫌な予感が頭をかすめた。五百メートルほど吹雪の中を抜けたころ、突然馬の鳴き声が聞こえた。そこには古い馬小舎があった。こんなところに住人がいるのかと感じ安堵する。やがて目前に三重に張り巡らされた有刺鉄線に囲まれ四隅に望楼がそびえている中に木造バラックが点在している建物が望まれた。無人のシベリア監獄であった。

我々のために急遽、病院として転用された暖かい病室、軟らかな寝台、清潔なシーツ等々を頭に描いて来たのに、ここは病院とは名前ばかり。長

らく放任されていたのであろう。埃だらけの冷え切った室内に囚人用の木製二段ベッドが並んでいる。少し元気な者と衛生兵とで病室となるバラックの枯れ木を探してペーチカに火を入れてやっと人心地がついた。時は昭和二十年十月十四日、場所はタイシエツト二十六キロ地点、通称「第五病院」と呼ばれ、我々が最初の入院患者であった。

周藤軍医大尉ほか数人の衛生兵、ソ連側は軍医少佐一人と衛生将校二人でスタートした。医療器具、医薬品も皆無に等しい中でなすすべも無く助かるべき生命がむざむざと失われていく無為の日々を衛生関係者は、どれだけ辛い思いで過ごしてきたことであろうか？

更に追い打ちを掛けるごとく、近年に無い凶作は抑留兵士にとつて栄養不良を招き、一層惨めな状況に追い込まれる結果となった。

珍しい南京虫が巢食う木製二段寝台に横たわり、栄養不足の痩せ衰えた肉体をシラミが夜も昼も容赦なく血を吸い続ける。

病院開院とともに、地区内各收容所からは多数の患者が馬櫃やトラックに乗せられて続々と送られて来た。日本軍医、衛生兵を始めソ連の軍医、衛生将校、看護婦の昼夜を分かたぬ献身的な活躍により、昭和二十一年の春から死亡者は減少の兆しを感じられてきた。

そのころから患者は藁布団と毛布と白いシーツの上に寝かされ、木綿の下着、ハラータという白い病衣が着せられるようになった。日本やソ連軍医、衛生兵、看護婦等が増員され、医薬品も整えられてきた。どうやら病院らしくなってきた。患者用食糧事情も好転し、作業大隊では給与されない米飯と獣肉や脂がたっぷりに入ったスープが一日五回も配食された、干しりんごを甘いシロップで煮たものが果物代わりに時々出てくるという、内外ともに充実した内容と歩調を合わせるように、猖獗を極めた赤痢と発疹チフスは減少していった。

開院して程なく、所長として来たスハチエンカ

砲兵大尉の辣腕らつわんによるものが大であったと思う。

病院として本格化するにつれ業務の円滑なる運営上、退院患者の中から技術者等を選び作業班が作られていった。最盛時の作業を挙げておこう。

通訳、炊事、入浴、理髪、被服乾熱滅菌、洗濯、パン工場、労務事務、被服、縫工、靴工、大工、左官、炊事、営繕、鍛工、水運搬、馬櫃運搬、電工、消防、炭焼工、機材管理、雑役等で百人近くの人員が従事していた。各地から入院してくる患者たちは、不潔な生活環境のもと、乏しい食事と重労働にさいなまれ地獄さながらの日々を送っているとの情報が異口同音に伝わってくる。スハチエンコフ所長も事あるごとに「奥地のバタリオン（労働大隊）で働くお前達の仲間は大変な苦勞をしているのだぞ、それに比べればここは極楽だ。働きの悪い者はバタリオンに送り出すから覚悟しておけ」と訓示した。今、振り返ると收容所所長の言った通りであった。

開院当時は一日三十人あまりの死者が続き、搬

送担架が不足して梯子を代用した。四坪ほどの屍室はたちまち満杯となる凄まじい日々は、春の訪れとともに薄らいできて、あの殺伐としたシベリア監獄の印象が消え去り病院らしい雰囲気が醸し出されて来た。

遅い春から一緒に初夏を迎えると森には色とりどりのきのこが顔を出し、水辺にはにんにくと同じ強烈な臭いのするチエレムシヤ（行者にんにく）の緑の柔らかな葉がそよぎ、短い夏が走り過ぎて行く。

本格的な鉄道建設が開始されるという情報が広がり、タイシェット―ニューベルスカヤ近辺に収容されている将兵は続々と奥地に移動していると言う。入院患者も目に見えて少なくなってきた。九月に入り第五病院も奥地へと移動が決まった。

昭和二十一年九月二十八日の朝、スハチェンコフ所長と須藤軍医からなる日口関係者は名ばかりのベアチ・バリニツア駅から貨車に乗り込んだ。主の居なくなった病院には既に数組のロシア人家

族が到着して各バラックの掃除を始めていた。情報によれば彼らはウクライナから移動して来た鉄道員家族であると言う。

しばらく振りで見るとニューベルスカヤは、線路際に新しい家屋が建ち、入口にはロシア文字の看板と武装したソ連兵が立哨している。聞くところによるとバム鉄道の建設司令部とのことである。線路に沿って当時、珍しいと言われた米国の援助によるV8エンジン前輪駆動ダブルタイヤの「スチュードベーカー」とソ連製の木製ボデーの「ジス」と称するトラックが数台、待機している。ソ連関係者は「スチュードベーカー」我々は「ジス」に分乗して通称ブランク街道を北に向かって進む。斧鉞も入らぬ湿地の多い原生林を切り開き、伐採した松の巨木を二つ割りにして敷き詰めた道路が延々と続く。さながら陸の栈橋であった。

そして五キロメートルほどの間隔で日本人収容所やロシア人監獄がある。どれも有刺鉄線と高い塀で三重に囲まれ、四隅には高い望楼があり警戒

兵が四六時中、自動小銃を構えて警備している。夜間に入ると要所に設置されているサーチライトが鋭い光芒を放ち、有刺鉄線の中をセパードが走り回っているという同じ形式の建物であった。

時折、沿線で日本兵士の作業姿が目に入る。どちらとも懐かしげに手を振り大声で「おい元気かい」とか「頑張ってー」等と励まし合うのであった。やがて大きな川の岸辺に到着する。今夜はここで野営と決定。森の中で焚き火を焚いて夜を明かす。

朝の光を浴びて川岸に立つ、チュナ河と呼ぶこの河は二百メートルほどの川幅で滔々と流れている。鉄橋は建設中である。橋の代わりに巨大な弁当箱を思わせる「浮き棧橋」のような四角い鉄舟のようなものが接岸している。その上にトラックや人間が乗り、繫いだワイヤーを対岸で巻き取る事により鉄舟は対岸に牽引される仕組みであった。

再びここからトラックに乗り、その日の夕刻、タイシエット郊外百七十八キロの目的地チュクシ

ヤに建設中の三三七〇病院に到着した。

現場は、例のとおり長さが三メートルの松丸太で外堀を囲われた広大な敷地内には直径一メートルほどの松が密生する中に建築途中の病棟が点々と並んでおり、足の踏み場もない状態であった。四キロ離れた第四二ラーゲリからの作業隊が来て建築中とのことであった。

我々病院作業隊員は第四二ラーゲリに間借りして、開院まで連日、病院建設作業に従事した。昭和二十二年一月末、木の香りも新しい病院に移ることが出来た。我々も作業隊の一員としてそれぞれの業務に就いた。私は洗濯場の作業を続けた。その間、解剖棟、伝染病棟、院長官舎、職員官舎等が建てられ、門の上にはバム鉄道を象徴する機関車の絵とバムの文字、三三七〇ラザレットとロシア文字で大書した横看板が取り付けられ、チュクシヤ近辺のラーゲリから患者が送り込まれ始めた。私は二十二年七月、突然一九七キロメートルの第一ラーゲリに転属された。その後、病院

は昭和二十四年九月に閉鎖されたと言う。

第十話 登録文書（捕虜カード）

表題に関しては、シベリア強制抑留者のための財団より（平成十五年五月第三十一号のP6）「抑留者の『身上調書』が提供されます。希望者は申し込みを……」の記事を見て直ちに厚生労働省へ申請をした。

旬日を経て自分の当該文書が到着、直ちにロシア語辞典を片手に翻訳、念のため国際交流員のロシア人に誤訳の有無について目通しをしてもらった。

前記の第五病院開設当時は、独ソ戦争に勝利したとは言うものの、ソ連市民生活は「ドン底」の状態におかれていた。更に近年にない不作と、数年振りの強い寒気という最悪条件が重なる中に多数の日本軍将兵がシベリア各地にばらまかれたのである。

遠い満州の各地から、祖国帰還の甘言に騙されて家畜並の扱いで貨車に積み込まれ二週間余りの

長途を移送、休息の暇もなく極寒の密林に放り出され過大なノルマのもとに原生林の伐採、鉄道建設等の重労働を強制された。加うるに労働に値する食糧は適正に給与されず、その内容も馬糧用の高粱、えん麦等とかつて口にしたこともない様な物が支給された。収容所内には電灯もなく、ポロ布に石油を浸した即席ランプや白樺の樹皮を燃やして光源とした。

入浴や洗濯もままならず、虱、南京虫と同居という不衛生極まる日々であった。清潔を旨とすべき病院の作業隊がこのような状態である。一般の収容所は言うまでもない。

この答は、やがて恐るべき結果となって現れて来た。連日、夜となく昼となくおびただしい患者が貨車、トラック、馬籠で送られて来る。

開設間もない「病院」とは名ばかり、数多くあるシベリア監獄を転用したに過ぎない。薬も医療器具も無い。数人の日ソ軍医と衛生兵、ソ連人看護婦が配置されているのみであった。鉤も掛けら

れていない松板の二段寝台に、汚れた軍服のまま一枚の毛布に患者はくるまって、ひたすら回復を待つしかなかった。

当然、助かるべき生命が何の医療の手も差し伸べられないまま、いとも簡単に尊い生命が奪われていく実態を何度も見ながら涙した。当時の患者の大部分は、赤痢、発疹チフス、栄養失調等であった。

一日二十〜三十人前後の死者が出た。屍室に搬送する担架が足りなくて梯子の上に死者を載せて搬送している状況に何度も出くわした。

唯物論のお国柄か？ 死んでしまえば一個の物体に過ぎずと、着ている下着は全部脱がせて丸裸にして埋葬するのである。零下四〇度〜五〇度の外気は、死体をたちまち凍結してマネキン人形のごとく固く凍らせてしまう。せめて下着を着せて葬ってあげるのが死者への礼儀と思うのだが、ソ連当局は下着を着せることは無駄であると絶対に認めない。

墓地への搬送はさすがに良心がとがめるのか？ 人目を避けて、いつも日没寸前の時間に死体搬送の使役がなされた。鉛色の空を背景に白一色の雪の中を薄暗い光のもとで、触れ合えば金属的な音がするほど固く凍りついた死体を十体ほど馬櫓に山積して近くの山中の墓地へと走る。

ツルハシも跳ね返る凍土のため、あらかじめ松の木を伐採して大きな焚火を翌朝まで焚く、表土が軟らかいうちに三十センチほど、大急ぎで掘る。その作業の繰り返しにより二メートル×四メートル、深さ三メートル、約五十体ほど埋葬可能な墓穴が三カ所、掘ってある。

その中に頭を東に向けて一体ずつ梯子で降りして並べて行く。やがて満杯になったら雪を集めて穴を覆う。土が軟らかくなる春先に改めて覆土し、まな板ほどの厚板に死者の姓名をロシア文字で化学鉛筆（水分に触れると紫色のインクになる）を使って書き込み、墓穴に立てて終わる。一〜二カ月も経って墓地に行くと、風雪にさらされた墓標

の文字はほとんど消えかけている。

当時、私はこの墓地に眠る使者たちは祖国日本に通報されているのであろうか？ この思いが頭にこびりついていた。

タイシエット地区に抑留されている日本軍将兵は、悪魔スターリンが最重要事業として挙げている『バム鉄道建設』の本格化に伴い、最終目的のブティックを目指しチュエナ河から東北に広がる原生林へと移動して行く。第五病院も昭和二十一年九月二十八日に閉鎖して百七十八キロ奥地のチュクシャ郊外に移動した。

新しい第五病院は密林の中に建築中であつた。四二ラーゲリの仲間たちが作業に従事しており、病院勤務の我々も作業を分担しつつ冬を過ごした。雪解けと共に新しい「第五病院」はオープン。再び、我々は病院作業隊の一員として日常院内作業に就いていた。

昭和二十二年の五月、突然に病院側から個人番号が手渡された。ツェリコフア衛生中尉が透明な

液体に浸したガラス棒をペン代わりにして十センチ長さに切った包帯の上に番号を書いたものを一人ずつ手渡し作業服の左胸に縫い付けるよう命令された。玉川通訳の説明では、今渡された番号は各人の個人番号であり、祖国日本に帰還するまで、この番号で処理されるから紛失しないよう心掛けてほしい。との事であつた。包帯に水のような液体で書かれた番号は半日ほど経過したら黒い数字として現れてきた。墨汁が無いので硝酸銀の溶液を使ったのであろう。

時を同じくしてラボーチバラック（作業員宿舎）の中では全員漏れなく夕食後、一人ずつ呼び出された。病院の人事係将校と玉川通訳と本人の三人が面談して俘虜番号に基づく「身上調書」の作成作業が行われた。

タバコの巻紙は当然のこと、入院患者のカルテすら紙不足で難渋していた当時のソ連には珍しく厚手の上質紙を使ったA四判クラスの用紙に姓名、生年月日、入隊時の居住地から始まり学歴、

職歴、所属部隊、兵科、階級、家庭環境等四十項目に及ぶ内容のものが記載されており、その項目に沿って調査された。そのとき人事係将校の説明によれば、この調書は三部ずつ作成される。一通はソ連政府に、一通は日本政府に送付され、一通はこの収容所に保管される。今後は本人が移動の際にはこの「身上調書」も同様に引き継がれ日本に帰国するまでついて回ることであった。

我々は誰言うことなく、着用を強制された個人番号を「捕虜番号」。身上調書を「捕虜カード」と呼ぶようになった。

私の番号は七四五一六四が付けられた。先頭の七はタイシエツト地区を標榜する数字であると玉川通訳は説明してくれた。胸に付けた番号も激しい労働のために一カ月も経たないうちにどこかへ消え去り、それと共に番号そのものも忘れてしまった。

同じく、この時期にモスクワからの命令と称して、以後死者の取扱いについては清潔な下着を着

せ木工が松の板で製作した寝棺に一体ずつ収め、捕虜番号を記入した白樺の木札を手首に結わえ埋葬するように改善された。もちろん、埋葬箇所には捕虜番号を明記した木札が墓標として立てられた。

思えば、長い長い時間の末、やっと人間らしく取り扱われるようになった。入ソ当時は、一糸まとわぬ全裸のマネキン人形の様な姿で非人間的な扱いを受けた多くの戦友の不便を思い、新たな涙に頬を濡らした。

去る平成十三年〜十五年、イルクーツクとタイシエツト地区の遺骨収集に参加して、時折り遺骨と共にメガネ、義歯、軍服のボタン、階級章等が発見されるが捕虜番号を記入した木札は分解して見当たらず、改めて約六十年の星霜を経てきたことを実感させられた。

日本政府が主張する関東軍、朝鮮軍、樺太等の兵士、軍属、民間人を中心とする強制抑留者数十万人に対し先般、やっと重い口を開いてロシア

の発表した数は五十九万四千人とのことであった。

私は思う、入ソ直後に「身上調査」が正しく整備されていたら、このような数の開きは最小限に止められていたことと確信するものである。

ちなみに、私が入ソしたのは昭和二十年九月某日。それに対し「身上調査」が作られたのは昭和二十二年五月三十一日であった。

巷間、言われるように昭和二十年末頃から二十一年にかけてはシベリア各地で最も多くの死没者が出たことは、それぞれの抑留記にも詳細に記録されている。

#### 第十一話 糸と針

シベリア抑留経験者ならば誰しも苦しい抑留当時、第一に求めるものは黒パンを代表とする食物の類いであろう。食物こそ命の綱なのである。次に大切なものは、と問われれば私は躊躇なく「糸と針」と答えるのである。身につけているのは肉体と同様、くたびれきった「ぼろ切」のような被服、激しい労働によって簡単に穴が開いたり鉤裂

きになってしまふ。厳冬期にこのままで作業に出れば、たちどころに冷気が侵入して凍傷になってしまう。特に手足の部分がこの影響を多く受けたことを何度も体験させられた。過重なノルマに疲れ果てた体を鞭打ちながら手作りの暗いランプのもとで穴の空いた手袋、靴下、ズボンを慣れない手付きで修理して明日の作業に備えてから、やつと寝に就くのが日課であった。

僅か数センチの綻びを甘くみて、翌日作業に出たらしばらくするうちに手足の凍傷に罹り手遅れの場合は切断と言う恐ろしい結果をもたらす。

それゆえに糸と針は、黒パンに次いでの高貴重品であった。昭和二十一年の三月のある日、タイシエットの第五病院での事であった。どこかのライゲリから送られて来たのか十人余りの兵隊が貨車で送られて来た。病院まで五百メートルほどの道を汚れた毛布を肩から被り、よろめきながら歩いて来るのに出会った。

その中の一人の兵隊は杖をたよりに苦痛に歪ん

だ顔で最後尾を歩いていった。警備兵のサーシャ伍長は気の良い男であり、彼のシャツをときたま洗濯してやっていた仲である。

「オイッ サーシャ、この兵隊は俺が背負って行くからな。良いだろう？」と彼の了解を得てその兵隊を背負った。「もうすぐ病院だ。はやく元気になって下さい」と励ましながら病院に到達した。その兵隊は律儀な人であろう。苦しい息の中から薄汚れたものをポケットから出して私に差し出し、うつすらと涙を浮かべ「こんな親切にしてもらったことは生まれて初めてのことでした。私の感謝の気持ちです。どうぞ受け取ってください」と拳骨ほどの薄汚れた包みが差し出された。中身は何か分からない。

同じ同胞の苦しみを少しでも和らげることが出来たら、と言う気持ちでお手伝いをさせてもらっただけだ。あなたの厚意だけで十分だと辞退したが、何としても受け取って欲しいと何度も言うので、それでは有り難く頂戴いたしますと受け取っ

て別れた。

別れ際にふと見ると、黒く汚れた綿入り防寒衣の下の夏服の襟元に、金筋一本に三つ星の階級章が、ちらりと見えた。下士官の最高の階級である曹長であった。我々兵卒からみれば雲の上の人である。つい二カ月ほど前までは満州のどこかの部隊で、多くの兵隊にかしづかれて何不自由なく過ごしていたであろう。名前も聞かなかったこの曹長殿の過去を自分なりに想像して宿舎に帰った。

藁布団の上に座り、彼の曹長殿からもらった小さな包みを開いてみたら何と、軍足（白木綿糸で編んだ軍用靴下）をほぐして糸巻きに巻いたものであった。手垢に汚れて白い糸がネズミ色になっている。シベリアでは何にも優る。こんな素晴らしいプレゼントを頂いて久しぶりに心が安らいだ。おまけに針が一本付いていた。

この糸と針のお陰でマイナス四〇〜五〇度の寒気の中で私はどれほど助けられた事であろうか。道端やロシア人のゴミ箱等で拾った布切れを修

理材料として連日のごとく修理を重ねた被服は刺し子ぞうきんのように分厚くなっている。

特に針は貴重品であった。針一本と黒パン三五〇グラムと交換されていることから、その重要性は想像されるであろう、

器用な者はトラックのワイヤロープをほぐし五センチほどに切り、毎日石ころで丹念に磨き先端を尖らせる。針穴は斧の先端を使って小穴をあける。口では簡単であるが、完成するまでの時間と努力はなみ大抵ではない仕事であり誰にも出来るものではない。

今でも靴下や手袋のつくりにかけては自信をもっているが、腕を發揮する機会はとくに消え失せてしまった。使い捨てが主流の贅沢な現時勢を喜ぶべきか悲しむべきか。

## 第十二話 勲章

綏芬河から国境を越えてソ連のグロデコフへ入った。道で出会うロシア人男女の地味で質素な風采を見て独ソ戦争で勝利したものの戦時中の庶民

生活は相当な犠牲を強いられていたことが明確に読み取れた。だが市民の男女を問わず上着の上に勲章を佩用はいようしていることが奇異に感ぜられた。偶然に目に入った日が何かの記念日か祝日であったのか？ と思っていたが、よく見ると普通の日でも勲章を佩用している、大の大人が勲章をぶら下げて仕事をしているのである。

日本では日常、軍人の勲章佩用は何ら奇異に感じられなかったが、民間人が人前で佩用しているのを見ると本人にとって何か意義のある場合と受け取られていた。今でも日本人は勲章を授与されたら、ほとんどの人は勲章と勲記を額縁に入れて客間の長押なげしに飾るケースが多い。

勲章は国家に何らかの功績があつた個人に報いるために授与されるものである。と言う趣旨から言えばロシア人が日常、胸間に輝かせているのはもつともなことだと思ふ。

背広の胸元だけでは足りなくて横腹にまで勲章を佩用している姿は、さながら魚の鱗を思わせる

きらびやかなもので、その重量も相当なものであったろう。

バム鉄道建設当時の思い出として収容所長の老少佐の胸には五つの勲章を常に佩用しており、貨物列車の脱線事故のとき等、我々の先頭に立って現場に駆けつけることがよくあった。そのときは勲章がジャラジャラと大きな音がするのを片手で押さえながら走る様子が思い出される。

また若い美人のツエリコフア衛生中尉の豊富な胸に輝く独ソ戦争で得た赤星功労賞と三つの従軍記章はいつも新品の様にピカピカと光り輝いていた。他の将校連中の勲章は、くすんだ色であり対照的であった。その訳とは彼女は毎晩、勲章を磨くのが日課であったと言う。資本主義、社会主義といかなる主義の社会でも勲章の持つ魅力は大きい。

「針と糸」で紹介した曹長殿から頂戴した、あの貴重な糸が残り少なくなっていく、ある日、芯が見え始めた。好奇心から、その芯を取り出した

ら何と、勲七等青色桐葉章を新品の満州国紙幣百円札で包んだものが芯にしてあった。

下士官では最高の勲章を受章していたのである。彼の大きな心の支えとしてシベリアまで隠し持ってきた勲章の魅力とはなんであったのだろうか？シベリア慰霊旅行に何度か行くうちに気が付いた。昔のように勲章を胸間に光らせて歩く軍人や市民の姿が見受けられなくなったことである。

知人のロシア人になぜだろうと聞いてみたが、なぜか分からないとの返事であった。モスクワ、イルクーツク、ハバロフスク等の都会の露店の片隅のガラスケースの中に、かつての栄光を誇った数々の功労賞や勲章が色あせた姿でゴロゴロと転がっており、誰も見向きもしない。

恩師であった故川島四郎閣下は軍用糧食の世界的な権威者で終戦時、陸軍第七技術研究所長の要職におられた。先生ご自身も多くの勲功を示す勲章を持っておられたが空襲で全部失われたと言う。

逝去される数年前、先生は「片山君、人爵より

も天爵だよ。健康で長寿こそ最高の勲章だ」と穏やかに語られた。そのお言葉どおり昭和六十一年十二月三日九十二歳の天寿を全うされ黄泉に旅立たれた。

### 第十三話 休息の家

ラーゲリには定期的に日本新聞（抑留兵士洗脳のための新聞・ハバロフスクで発行）が送られて来た。ソ連の代表新聞であるプラウダやイズベスチヤの政治、文化、産業、教育、医療、科学、歴史等の紙面から、いかにソ連が世界各国に抜きん出て素晴らしい国家であるかを誇る記事を翻訳して大きく採り挙げるほか、日本の国内ニュース、各地ラーゲリの情報などや小説も掲載され多彩な内容であった。

国内記事でソ連人が職場で常にノルマを完遂している優良労働者には国家がその労に報いるため本人やその家族を『休息の家』と称するところで一定の期間、休息の恩典をうけることが出来ると写真入りで大きく採り上げられている記事がしば

しば目に入った。

温暖なソチ地方に国家の手で作られた保養所に優良労働者や家族が満ち足りた笑顔で温泉やレジャー、スポーツに興じる姿が載っており、その説明には休息期間中は有給休暇の取り扱いを受け、自宅からの往復旅費は支給、保養所での食費や宿泊費は全部無料であると言う。勤労意欲の向上策の一つである。

この『休息の家』の日本版が一部のラーゲリで開設された。昭和二十三年ごろのことであった。ところはタイシエツト百四十三キロの第三三ラーゲリであった。

入ソ以来、階級章が幅を利かし早朝の点呼時には東方遥拝、五箇条奉唱等が旧軍隊当時のままを踏襲されてきた日々を過ごして来た者にとつて、第三三ラーゲリは明るく新鮮なラーゲリであった。シベリア各地のラーゲリが反軍闘争から民主化運動へ展開していく波の中に、このラーゲリも乗っていたのであろう。

日本将校による大隊長の制度は既になく、それに代わる中央委員が選挙で選ばれる委員長のもとに文化宣伝、労務、生活、青年の各部長による自主運営がなされていた。ソ連当局がその後ろ盾として介在していたことは当然のことである。

弁論大会、環境美化コンクール、演劇、正月料理、BKと称する日本人警備担当者、スタハーノフ運動の日本版である平塚運動に刺激された生産競争、ノルマ完遂者に賃金支給、それに伴う各人の作業成績の日々成績の公示、週一回の売店での物品販売等、活気あふれるラーゲリであった。

反面、タイシエツト政治学校で鍛えられたアクチーフが三人投入され、彼らによる政治教育も毎夜のように行われ、理論と実践の両面からの締め付けの日々でもあった。このような環境の中に『休息の家』が開設された。偶然にも私はこの恩典に浴したのである。千人の中から一回二人が選ばれた。各宿舍長から推薦された者をラーゲリの中央委員会が審査決定されるのであらうと思われる。

作業優秀者でもない平凡な作業班の一員に過ぎない私が、なぜ選ばれたのか未だに分からない。折角の恩典を拒むこともあるまい。班員の羨望の声に送られてオデファイ・ドーマと呼ばれている休息の家にK氏と二人が入室した。ラーゲリの一隅に十坪ほどの新しいログハウスが建っている。白壁に囲まれ、大きな窓には白いレースのカートンが掛かっている。清潔なシートと毛布で囲まれた二つのベッドが部屋の中央に置かれている。

傍らの書箱には『ソ連共産党小史』『史的法的弁証法』『蟹工船』『太陽のない街』『絞首台からの叫び』『日本新聞』綴りなどの図書が自由に閲覧できるよう備えられている。

まず、入浴券や食券が与えられ、昼の日中に入浴場に行く。客は我々二人だけ、湯桶にはたっぷりの温湯と石鹸が出され、数年ぶりでゆったりとした気分で身体の疲れをほぐす。

湯上がりには清潔な下着が支給され、爽やかな気分になる。食事は交付された食券を炊事に持参

すると一人当たり二人前の食事が毎回給与された。砂糖もタバコも二倍であった。

第一日目は欲も得もなく、ぐっすりと眠った。第二日目は朝早くから夜遅くまで作業に追い立てられている仲間の事を思うと、何か罪悪感のようなものに駆られてジッと寝転んで本を読んでいる気分になれず、同じ悩みを抱いていたK氏と相談した結果、先進寮と呼ばれている自分達の宿舍の室内美化をして謝意を表そうと決めた。早速、ラーゲリの裏の森に生えている漆塗りの箸のような小豆色のつやつやとした灌木の小枝をひと抱え刈り取り、新聞紙を桜花の形に切ったものを大量に用意した。絵の具代わりに炊事でビーツ（ロシア料理に使う濃紅色の大根）を一本もらい受け、その絞り汁を紅い絵の具代わりとした。

第三日目には宿舍に上記のものを運び込み、新聞紙で作った桜花をビーツの汁で紅く染めたものを小豆色に輝く小枝にあしらひ、満開の桜に見立てたものが沢山出来上がった。

それを宿舍の天井から室内いっぱい吊り下げ、春の雰囲気を盛り上げた。

やっと贅沢な三日間の休息から解放されて宿舎に戻ったところ、「ウワーツ凄ひ、満開の桜だ」全員から大好評の賛辞を受け、肩の荷が下りた思いであった。

僅か三日間の休息ではあったがその間、肉体労働は免除され空腹感も満たされ、文句のつけようが無かったが、過ぎ去った三日間の生活は日常生活との違和感が大きかったので精神的には疲労が残ったが貴重な体験であった。

第十四話 バム鉄道建設（タイシエットからブラーックまで）

バム鉄道とは、バイカル・アムール鉄道の略。シベリア鉄道の略。ウラジオストクから四千四百七十五キロの地点（モスクワまでのほぼ中間点にあたる）タイシエットを西の起点としてバイカル湖の北側を通り樺太の対岸ソフガヴァニ（ソビエツカヤ・ガヴァニ）にいたる全長四千三百キロ

に及ぶ鉄道である。現在走っているシベリア鉄道に対し、この鉄道を第二シベリア鉄道とも呼ばれている。

スターリンは中露国境、特にウラジオストック（ハバロフスク間を通るシベリア鉄道は軍事的な弱点があることを指摘し、併せて広大なシベリアに眠る豊富な森林と地下資源の開発、輸送等の観点から一九三七年、ソ連の最大国家事業として建設が開始された。

一九四一年、タイシエツトから百五十キロまでレールが敷設されていたが、独ソ戦争勃発に伴い五十八キロ地点のニューベスルカヤ駅以北の鉄道を撤収して独ソ戦線に資材として転用したという。一九四五年深夜、関東軍将兵は日本帰国の甘言に乗せられて遠路はるばる満州の地から貨車で家畜並の扱いを受けつつ、この地ニューベスルカヤに降ろされた。

駅舎もプラットホームもない。車止め寸前で機関車が停止している。その先は、深い密林の中に

切り開かれた一条の赤土の路盤のみが密林の奥に消えていた。

ここから我々は三百五十キロ奥地のブラーツクまで（一部は更に以北七百二十キロメートル、ウスケートまで）の鉄道建設に従事させられたのである。杜撰なロシアの諸資料によればこゝ、タイシエツト地区に抑留された関東軍将兵の人員数は、一般に四万五千人と発表されているが私自身に付与された番号は四五一六四であることから推察されるように実際はもっと多くの人員が投入されていたことと確信する。

バム鉄道建設はタイシエツト地区（イルクーツク州）と同時期にフルムリ地区（ハバロフスク州）、ウルガル地区、トインダ地区（アムール州）、コムソリスク・ナ・アムーレ（ハバロフスク州）でも日本人抑留者が投入されている。

斧鉞の入らない松、白樺、樅、落葉松等の巨木が密生する原生林が延々と続き、飛行機から見ると巨大な黒い絨毯を敷き詰めたようである。周知

のとおり悪環境のもと、先ず密林の中に宿舍を建設、同時に建設資材と交通のための道路建設であった。平坦な道路建設でも大変であるのここは湿地帯が多く、夏季は胸まで浸かる泥濘の中、巨木を伐採して井桁に組み、その上に直径四十〜五十センチほどの松を四メートルほどの長さに切り、二つ割りにしたものを三・五ミリ幅に並べ地獄楔くさびを打ち込んで道路に仕上げる。一方、測量で示された地点を中心に差しあたり三十メートルの範囲で伐採と森林清掃をして路盤を構築する。

それに要する資材は斧とのこぎりとラバート（スコップ）が中心で土砂運搬にはターチカ（木製一輪車）が用いられ、専ら人力による作業が厳しいノルマによって実施された。平均気温マイナス四〇〜五〇度の厳冬時は、地表から三メートルは岩のように凍結しており、つるはしも受け付けぬ土壌をダイナマイトで爆破しながら掘り進むのであった。

路盤の高いところは、一輪車に土壌を積み込み

低地に投げる作業の連続であった。木製道路の整備によって当時の日本では見られなかった米国援助によるスチュードベーカーと称するV8エンジン前輪駆動の強力なトラックが建設機材を積んで奥地にやって来た。本格的な鉄道工事が始まった。エクスカバートルと称する巨大な（掘削機）が投入された。これも始めて見る土木機械であった。巨大な恐竜の口を思わせる様な鉄製のバケットが一回すくい取る土砂の量は一トン近くあるだろう。二回しゃくると土砂運搬用トラックが満杯になる。現在はどこでも見受けられるパワーショベルのことである。

昭和二十二年秋、百九十八キロ地点にある第一収容所でのことであった。あらかじめ期限が示されていたのであるうか？ タイシエットの建設本部の将校が多数、作業現場に来て監督を始めた。そして前例のないことであるが、近辺にあるロシア人監獄から比較的温順なロシア囚人を我々と同じ現場に数十人投入して日ソ合同で突貫作業をさ

せられた。

こんなことは後にも先にも無い経験であった。

隣同士でスコップを握り一日汗を流した。休憩時にタバコを吸いながらの雑談は、昭和十一年ベルリンオリンピックでの日本水泳の前畑秀子、遊佐正憲選手の素晴らしさを今でも覚えているとか、俺は昭和十六年日ソ中立条約締結時、モスクワで松岡洋右氏の閲兵に儀仗兵として参加していた。と丸坊主で小柄な松岡氏の表情をゼスチュアを交えて笑いながら披露するなど和やかな一時を過ごしたことが印象に残っている。

某日、赤く土の露出した一条の路盤がブラーツクの方が続いている作業境界線二百一キロの地点には、樅の木で急造されたミドリのアーチが立てられ建設本部の幹部将校や収容所長、監督将校達が集まり、この日を祝った。一段落したところで、三日も経たないのに機関車が黒煙を吐きながらレールや枕木を運んで来る。バラスも敷いてない赤土の路盤の上に二メートル余の枕木を並べ、二十

五メートルのレールを連結しながら線路を延ばして行くのであった。

常識では考えられない手荒な手法で、鉄道建設を急ぐ理由は？ バイカル湖から流れ出るアンカラ河の下流三百五十キロメートル地点のブラーツクに一九五〇年初頭、当時ロシア最大の水力発電所を建設のための資材運搬を目的とするための突貫工事と言われている。

そのため前述の掘削機や大量の土砂運搬トラック、線路敷設車が運ばれて来る。作業場にさっばりとした被服を身につけたアクチーフがやって来て「同志諸君、この敷設車はスターリン賞に輝く世界に誇るもので日本には無い。人力のはるかに及ばないこの素晴らしい働きに目を見張るものである。このバム鉄道が完成することはソビエト民主陣営の勝利であり、それはとりもなおさず日本の民主陣営の強化につながるものである。同志諸君、更に頑張ろう」と敷設車の前で自国の事のように胸を張り誇らしげに演説を打つのであった。

同じ日本人ながらこいつはどこの国の人間か？  
心ある者は感じていた。平成十四年厚生労働省の  
依頼でチタ方面に埋葬調査に行ったとき、小さな  
駅の引込線に赤く錆びた敷設車が停車していたの  
を見て懐かしく思った。

線路が敷設されたらされたで新しい苦役が生じ  
た。バラスも敷かない路盤の上に列車を走らせる  
結果、各所で脱線事故が続出した。昼間の疲れで  
ぐっすり寝入っている深夜、突如として衛門の  
鐘が乱打され全員集合の大声が飛び交う中を衛門  
前に集合、スコップ、鉋、鋸、鉄棒等を持って現  
場に急行する。巨大な大蛇がのたうったように横  
たわり、どこから手をつけたら良いか分からない。  
それも灯火一つない暗闇の森の中、人海戦術で  
三〇四時間するうちに夜が白々と明けてくる。復  
旧作業を終えてやっと収容所に帰り、朝食を済ま  
せると休息する間もなく日常の作業に駆り出され  
るのであった。その間、夜昼なしに大量のバラス  
が長列の貨車で運ばれて来る。夜中に機関車の甲

高い汽笛の音、間髪を入れずに響き渡る収容所の  
ガンガンと鳴る鐘の響きは「地獄の鐘」と恐  
れられた。

そしてバラスが入れると保線の作業が忙し  
くなる。こゝ、タイシエツト地区は湿地が多く地盤  
が軟弱である。一日で路盤が十〜二十センチも沈  
下する。例えて言えば羊羹の上に大量の土砂を盛  
るようなものだ。

昭和二十四年四月過ぎにブラーックの手前のア  
ンジョビーにある五十メートルほどの山を真っ二  
つに爆破する作業に従事した。山頂に数十メート  
ルごとに、予め測量されている目印の箇所をそれ  
ぞれ指示された深さに掘り、底部に火薬を入れる  
横穴を掘る。次に山麓まで連日、黄色火薬が貨車  
で輸送されて来る。セメント袋に詰められた火薬  
を人力で各人が一袋ずつ担いで山頂の穴まで運搬  
する。

山頂から、この景色を眺めると蟻が列をなして  
餌を運んでいるような錯覚に陥る。辛い日々がし

ばらく続いた。各穴の前に指示された寮の火薬が山積される。次にその火薬を太い白樫で作ったバットで袋の火薬を叩いて塊をほぐし、穴の中に充填していく。

次にロシア人爆破技師が信管と導火線をセツトし覆土を完了。

翌日は爆破現場から二キロ離れた収容所は休日に切り替えられた。収容所のすべての窓枠は全部外すよう命令され爆破時間の午前十時に発生する現象を待っていた。

定刻十時「ドカン」と腹に伝えるような鈍い音と、一瞬地震のように揺れを感じた。どんな大きな揺れが来るのか？ 期待外れの結果に終わったが翌日、現場に行つて驚いた。昨日まで眼前にあった巨大な山は饅頭を土で半分に切つたようにえぐられ、大きな谷間に変わっていた。赤土がむき出しになつている山の斜面には密生していた松の大木が大人の足ほどの太い枝という枝はことごとく吹き飛ばされ、太い幹だけが、さながら魚串を

立てたように並んでいた。一同はしばらく哑然として、この凄まじい光景に見とれていた。

居合わせた収容所長や爆破技師、現場監督将校達は口々に「ノルマー二〇パーセント」と喜びの声を上げて大はしゃぎであつた。爆破で飛ばす土の量が少なくてもマイナス。計画以上の土が飛んでしまつてもマイナスになると言う。今回は火薬の量に対し予期以上の成果であつたらしい。生まれて初めて経験した男性的で壮大な作業は、つかの間ではあるが爽快感を味わつた。

それから二カ月後の七月下旬のある日、いつものとおり路盤作業の最中に突然「全員ダモイ」の命令が下達され、長年の夢であつた祖国帰還の途についた。

待ちに待つた朗報に一同は、枕木運搬用のトラックに全員が飛び乗つて収容所へ戻つた。所内は蜂の巣を突つついたような状態であつた。機材の返納、舎内清掃等を手早く終了して「アンジョウビー駅」に集合する。

既に停車している長い無蓋貨車の列を背にして  
整列する我々を前にして、若い所長のニコライ少  
尉は「長年にわたる労苦に感謝するとともに、健  
康に留意して父母の国、日本に無事帰国されんこ  
とを祈る」と挨拶するや、顔をそむけて涙をぬぐ  
った。

毎日、怒鳴り散らしていた鬼監督のガンチャー  
ロフも今は感極まって両目から溢れる大粒の涙を  
ぬぐいもせず「ヤポンスキー・サルダート・トウ  
キヨウ・ダモイ・ハラシヨウ」と大声で叫びなが  
ら一人一人に大きな手で握手を繰り返して、祝福し  
てくれた。

間もなく互いに別れの手を振りながらダモイ列  
車は発車して次の「ブイオレフカ駅」に到着した、  
反対車線には既に我々の後に投入されるであろう  
長い女囚列車が停車していた。開け放たれた扉の  
中にはロシア人を始め、衛星国から朝鮮の女性ま  
で色とりどりの毛髪、容貌、服装で乗っており、  
警備兵の威嚇や制止を無視して我々に卑猥な身振

りや言葉を投げかけるのであった。我々のダモイ  
列車は、タイシエツト目指して進んで行く。

足掛け五年、苦難の日々を過ごしてきた沿線各  
地の収容所や作業現場を列車は一瞬のうちに通り  
過ぎて行く。その一つ一つの思い出が脳裏を去来  
し、胸迫るものがあった。五千人を超える死没者  
を出した、ここタイシエツト地区は受刑者にとつ  
て三大屠殺場の一つとして噂され、ソ連囚人の恐  
怖の地区としてつとに有名であった。日本人抑留  
将兵にとつてもシベリア強制抑留労働最悪の抑留  
地の一つであったことを改めて実感させられた。

バム鉄道建設の路は、遠く長かった。亡き戦友  
のご冥福を心から祈るものである。

今日までバム鉄道建設に関する多くの書物に目  
を通すと、この壮大な国家的大事業は、スターリ  
ンの指導のもと、ソビエト愛国青年の止むに止ま  
れぬ祖国愛に燃えた奉仕活動を中心に、共感する  
ソビエト国民有志の手で建設された世紀の大偉業  
であったと麗々しく称賛されている。

真実はタイシエツト（ブラーック）間の三百五十キロを始め、コムソモリスク地区や沿海州地区等の建設には、大部分が不当に強制抑留された日本人将兵と自国民たるソビエト囚人の血と涙によって建設されたものである。

この真実については隠蔽され、一言の記述もなされていらない。我々、強制抑留された日本人将兵は、この真実を世界に向けて「語り部」として永く語り伝えていかねばならない。

#### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二（一九二三）年十二月十五日  
軍 歴 昭和十九年十月 大阪府堺市 中部第

三一部隊（輜重第四連隊）

昭和十九年十一月 満州国黒竜江省林

口街 満州第二八七部隊

昭和二十年三月 満州国黒竜江省満道

街 満州代一八〇部隊

昭和二十年四月 満州国黒竜江省八面

#### 抑留歴

通街 満州第八八部隊

昭和二十年七月 満州国黒竜江省扣河

溝陣地構築

昭和二十年八月 満州国黒竜江省横道

河子陣地にて終戦命令受領

昭和二十年八月 満州国牡丹江省海林

街 関東軍海林兵器廠

昭和二十年九月 ソ連沿海州グロデコ

フ市郊外

昭和二十年～二十一年 タイシエツト

二十六キロ第五病院

昭和二十一年～二十二年 タイシエツ

ト 一七八キロ第四二ラーゲリ新第五

病院

昭和二十二年～二十三年 タイシエツ

ト 一九八キロ第一ラーゲリ

昭和二十三年～二十四年 タイシエツ

ト 一三五キロ森林ラーゲリ

ク ク タイシエツ

職

歴

ト 二九二キロ第十二ラゲリ

昭和二十四年八月 復員

昭和十七〜五十五年 福井県庁勤務

技術吏員（途中、兵役休職）

昭和五十五年〜平成十年

福井県立短期大学 非常勤講師

仁愛女子短期大学

福井赤十字看護学院

福井市医師会看護学院

福井歯科専門学校

天谷調理師専門学校

平成十年〜平成十七年 天谷調理師専門

門学校専任講師兼栄養研究室長

現在、福井遺族会のボランティアとして「シベリア抑留語り部」を担当

（福井県 佐々木 清佐夫）

はるかなる シベリア

愛知県 水野 治一

愛知県一宮市千秋町佐野において、自作農家、兄弟十人の六男として生まれた。（現在男一人女二人生存中、他は戦病死で故人）昭和十二（一九三七）年三月二十四日千秋尋常高等小学校高等科卒業。昭和十四年六月一日愛知県丹波郡農会就職、傍ら夜間青年学校に通学中の昭和十八年八月三日、赤紙召集により名古屋八部隊野砲高射砲隊へ。八月十日満州第二六三四部隊（兵器廠）に入隊、三カ月の初年兵教育を受ける。初年兵教育修了後、本部付経理班に配属、夜間は隔日部隊本部にて電話交換事務に従事、昼間は民間人の独身女性二人と交代勤務であった。

昭和二十年八月七日夜、交換業務に従事中、突然昼間勤務の交換嬢の一人が電話交換室に走り込み「兵隊さん、先ほどラジオのニュース放送で明